子宮粘膜殊ニ炎性子宮内膜ノ脂肪竝ニ 搔爬手術後ノ再生子宮内膜ニ就キテ

岡山醫科大學婦人科教室

關場代五郎

目 次

第一章 子宮粘膜珠ニ炎性子宮内膜ノ脂肪ニ就キ テ。

- 一緒言。
- 二 通常子宮粘膜ニ於ケル脂肪。
- 三 炎性子宮粘膜ニ於ケル脂肪。
- 四 通常子宮粘膜及ビ炎性子宮粘膜ニ於 ケル脂肪ノ意義。

五結論。

第二章 搔爬手術後ノ再生子宮內膜ニ就キテ。

- 一緒言。
- 二實驗例。
- 三 實驗例所見綜括。
- 四、结論。

第一章 子宮粘膜殊ニ炎性子宮内膜ノ脂肪ニ就キテ

一緒言

子宮筋層並ニ子宮粘膜ノ脂肪ニツキラハ既ニ Huguenin, Unterberger, Westphalen, Aschheim, 足立氏, 杉氏, 淺田氏, 村尾氏等ニヨリラ研究セラレタル所ナルガ, 余ハ寳脇例ヲ減ブルニ當リ先ヅ諸家業績ノ大要ヲ協錄セントス。

足立氏ハ成熟婦人ノ子宮ニ於テハ通常重屈折性ノ「リポイド」ヲ證明スルコト能ハズタダ出血竈ニ近キ粘膜ニ僅ニ之ヲ見得ルコトヲ述べ、淺田氏ハ二十八例ノ子宮粘膜ニッキ「ノイトラルロート」、「ニールブラウ」、「ズダン」III 等ノ染色、スミス氏法、フィシュラー氏法、重屈折試験等ヲ行ヒ其ノ内二例ニ於ラ重屈折性物質ヲ證シ得タリ、尚ホ同氏ハ中性脂肪ハ通常子宮粘膜ニ之ヲ見ズ、子宮粘膜殊ニ月經前期及ピ月經期ニ多ク見ル脂肪ハ狹義ナル「リポイド」ノ純粹體ニアラズシラ種々ナル「リポイド」ノ混合狀態ニアルモノナラント述ペタリ。

Aschheim 又普通ノ子宮粘膜ニハ中性脂肪ヲ見ザルコトヲ記載セリ。

Hueter ハ慢性質質炎子宮ニ於ラ筋層ニ脂肪ヲ認メ Unterberger ハ子宮出血ノ 為剔出セル十例ノ子宮筋層及ビ多數ノ實質炎性肥厚子宮筋層ニ於ラ常ニ多量ノ 脂肪ヲ證明シ、特ニ其ノ硬度軟ナル子宮ニ於ラ脂肪量多キ事ヲ述ベ、慢性實質 炎ノ際ニハ筋層ニ於ラ變性現象トシラ脂肪現ルヽコト及ビ産褥以外炎症ニ關係 ナク僅少ノ脂肪ヲ子宮筋層ニ見ルコト稀ナラズト記述セリ。

Huguenin ハ三例ノ妊娠子宮及ビー例ノ産褥子宮ヲ檢シ滑平筋繊維ノ「ザルコプラスマ」ニ於テ核ノ兩極ニ近ク「ズダン」III ニョリ染色セル大小種々ノ脂肪滴ヲ證明シ得タリ,而シテ同氏ニョル時ハ「ザルコプラスマ」ニ於ケル脂肪ハ子宮復舊ノ産物ニアラズシテ妊娠産褥子宮以外通常ノ子宮ニ於テモ之ヲ認ム,妊娠子宮ニ於ケル脂肪ノ増加ハ分娩行為ニ向ツテ子宮筋ニ必要ナル豫備物質ト看做スペク決シテ變性ノ徴候ニアラズト。

杉氏ハ九十一例ノ屍體ョリ得シ子宮及ビ十三例ノ手術ニョリ剔出セル材料ニッキ筋層及ビ粘膜ニ於ケル脂肪ヲ檢シ不偏光性「リポイド」ハ子宮粘膜及ビ筋層ニ於ラ常ニ證明シ得ルコト,該「リポイド」ノ量ハ春機發動期以前ニハ一般ニ僅少ニシラ成熟婦人ニ於テヤ、増加シ,更年期以後一層増加スルコトヲ述べ炎症性變化ヲ有セル産褥子宮ニ於テハ多量ノ脂肪ヲ證明シ得ルコト,不偏光性脂肪ノ外ニ重屈折性難溶解性脂肪ノ證明セラル、コト及ビ之等脂肪ハ細胞障碍ノ結果現ハル、事等ヲ附記セリ。

村尾氏ハ五十八例ノ屍體ョリ得シ子宮及ビ五例ノ剔出子宮ニッキ種々ノ脂肪染色ヲ行ヒ,其ノ粘膜ニ於ケル所見トシラ曰ク,粘膜上皮細胞及ビ腺細胞ハー般ニ脂肪ヲ沈著セシメザレドモ,少數ノモノニアリラハ少許ノ中性脂肪及ビ單屈折性類脂肪ヲ核ノ周圍ニ於テ殊ニ基底部ニ多量ニ沈著セシム,固有膜結締組緑ハ一般ニ脂肪沈著ヲ認メシメザルモ,比較的屢々少許ノ中性脂肪及ビ單屈折性類脂肪ヲ沈著セシム,殊ニ稀ニ極メテ多量ノ「ヒョレステリンエステル」其ノ他ノ類脂肪ヲ沈著セシムルヲ見タリ。

余ハフライブルグ大學病理學教室ニ於テ同大學附屬醫院婦人科ヨリ寄與セラレタル,四十七例ノ剔出子宮及ビ搔爬子宮內膜ニッキ其ノー半ハ十%ノ「フォルマリン」中ニ,他ノー半ハ七十%ノ「アルコール」中ニ固定シ,「フォルマリン」中ニ固定セルモノハ凍固「ミクロトーム」ニヨリ切片ヲ作リ,之ニ「アッオ」色素ニヨル脂肪染色竝ニ「オキシダーゼ」反應ヲ行ヒテ白血球分佈ノ狀態ヲ明ニシ,別ニ同一材料ノ「アルコール」中ニ固定セルモノヨリ「パラフィン」切片ヲ作リ,之ニバッペンハイム,ウンナ氏ノ「ピロニンメチールグリュン」ニヨル「プラスマ」細胞染色ヲ行ヒ,定型性ノ內膜炎ノ九例ヲ得,之等粘膜ニ於テ特ニ脂肪沈著ニッキ注目スペキ所見ヲ得タレバ茲ニ其ノ梗概ヲシルシ竝ニ種々ノ月經週期ニ於

ケル通常子宮粘膜三十八例ノ脂肪所見ヲモ併記セントス.

- v. Gierke ハ中性脂肪及ビ脂肪ニ類セル物質(狭義ノ「リポイド」) ヨー括シラ「リポイド」ト稱シ之ヲ次ノ如ク細別セリ。
- ー、窒素及ビ燐ヲ含有セザル「リポイド」即チ中性脂肪、游離脂肪酸、石鹼、 「コレステリン」、「コレステリン」脂肪酸「エステル」。
 - 二,燐ヲ含有スレドモ窒素ヲ含有セザル「リポイド」即チ「チェレプロシーデ」。
 - 三,燐及ビ窒素ヲ含有スル「リポイド」即チ「ホスハチーデ」。

余ノ脂肪トハ v. Gierke ノ所謂廣義ノ「リポイド」ヲ意味ス。

「アッオ」色素ニョリ染色スル脂肪ハ川村氏ニョル時ハ「グリセリンエステル」,「コレステリンエステル」,「フォスハチーデ」(「スインゴミエリン」,「ケフアリン」)「チェレブロシーデ」, 脂肪酸, 石鹼, 及ビ「コレステリン」ト脂肪酸或ハ「グリセリンエステル」又ハ「ケファリン」トノ混合物ナリ.

二 通常子宮粘膜ニ於ケル脂肪

本項ニ於テハ他ノ諸家ノ脂肪ニ關セル業績ト比較シ易カラシメン為月經週期 ノ分割ヲ月經間期, 月經前期及ビ月經期トセリ.

通常子宮粘膜ニ於ケル被檢例數三十八例ニシラ內月經間期二十三例, 月經前期十例, 月經期三例, 更年期二例ナリ.

イ 月經間期

月經間期二十三例中間質ノミニ脂肪ヲ證明シ得シモノ十例, 間質並ニ腺上皮及ビ表層上皮ニ脂肪ヲ證明シ得シモノ四例, 上皮間質共ニ脂肪ヲ證明シ得ザルモノ九例ナリ。

之等ノ「リポイド」
様物質ハ上皮内ニ於テハ細微顆粒トナリ瀰漫性ニ細胞中ニ存スル場合多ク又間質ニ於テハ最小滴狀又ハ細塵狀ヲナシ間質細胞及ビ間質細胞間ニ之ヲ見ルモ亦脂肪顆粒細胞ヲ所々ニ認メ得、腺管腔内ニ於テ時ニ小脂肪
滴又ハ脂肪顆粒細胞ヲ見得ルコトアリ。

淺田氏ハ Hitschmann Adler = 從ヒ月經後,月經前期迄ノ間ヲ二分シテ月經後期及ビ月經間期 = 分チ,月經後期ノ內膜九例ニッキ脂肪ノ腺及ビ間質ニナキモノ三例,腺ニナクシテ間質ニ少量存スルモノ四例,腺及ビ間質共ニ少量ヲ認メ得シモノニ例ヲアゲ,月經間期ノ粘膜七例中腺間質共ニナキモノ一例,腺ニナ

ク間質ニ少僅ニ存スルモノー例, 腺間質共ニ僅少ニ存スルモノ五例ヲ記載セリ、 Aschheim ハ七十六例ノ通常子宮内膜及ビ五十六例ノ病的狀態(腺ノ肥大, 浮腫, 間質性内膜炎, 腺性筋炎)ニアルモノ都合百三十二例ノ間期子宮粘膜ニ於ラ「スダン」IIIニョル染色ヲ行ヒ, 九十%ハ上皮中ニ脂肪ヲ見ズタヾ十%ニ於ラ脂肪ヲ上皮中ニ證明セリ, 又普通粘膜及ビ病的内膜共ニ約六十%間質ニ脂肪ヲ認メタリ.

余ノ僅少ナル例ニ於ケル月經間期通常內膜ノ脂肪含有量ハ,間質ニ於テハ Aschheim ノ成績ト殆ド同ジク上皮ニ於テハヤ、高キ率ヲ示セリ。

口 月經前期

月經前期ニ於ケル粘膜十例中,腺上皮,表層上皮竝ニ間質ニ共ニ脂肪ヲ認メザルモノ一例,腺上皮竝ニ表層上皮ニ脂肪アリラ間質ニナキモノ一例,間質ニアリラ腺上皮ニナキモノ一例,上皮,間質共ニ脂肪ヲ證明シ得シモノ六例ナリ・此時期ニ於テハ腺管ハ非常ニ迂曲シ腺腔ハ擴張シ其內ニ落脫上皮,白血球ヲ見又「ムチカルミン」ニョリ染色シ易キ分泌物中ニ多少ノ游離脂肪滴存ス,而シラ腺上皮ニ於テハ脂肪ハ主トシテ其ノ基底部ニ,多クハ小滴狀又ハ顆粒狀ヲナシラ出現シ時ニ細塵狀ヲ呈セルモノモ混在セリ,之ニ反シ該上皮ノ腺腔側ニハ極メラ僅少ニ存ス,一般ニ深部筋層ニ近キ粘膜腺管ニハ脂肪少シ,間質ニ於テハ所々ニ脂肪顆粒細胞ヲ見ル外,間質細胞ニテハ核ヲトリ圍ミラ細顆粒狀又ハ細塵狀ヲナセル脂肪ヲ認ム,間質細胞間ニモ細塵狀又ハ小滴トナリラ存セルモノアリ,表層上皮ニ於テハ瀰漫性ニ脂肪細顆粒出現スル場合多シ・

淺田氏ハ四例ノ月經前期粘膜=於ラ腺上皮及ビ間質中=共=脂肪ヲ證明シ得タリ、Aschheim ハ三十八例中三十一例、即チ約八十%=於テ上皮中=脂肪ヲ證明シ間質中=七十五%ノ割合=脂肪ヲ認メタリ、余ノ十例=於ケル所見モ殆ド、Aschheim ノ成績=一致セリ、タヾ間質及ビ上皮共=脂肪ヲ證明シ得ザリシー例及ビ間質=脂肪ヲ認メ上皮中=脂肪ヲ認メザリシ例ハ何レモ月經間期ョリ月經前期=移行狀態=アリシモノナリ。

八 月經期

月經期ニ屬スルモノ三例ニシテ其一例ハ月經第一日他ノ二例ハ經血中ニ於ケル股落組織片ニ脂肪染色ヲ行ヘルモノナリ, 月經時ニハ殘留セル粘膜ニ於テ著明ナル脂肪沈著ヲ腺上皮及ビ間質ニ認ム, 腺上皮ニテハ腺基底部ノミナラズ上

皮表層ニ於ラモ亦滴狀ノ脂肪出現ス,腺腔内ニハ分泌物ノ外脂肪ヲ有セル脫落 上皮,游離セル大小脂肪滴及ビ白血球ヲ見ル,間質ニテハ所々ニ脂肪顆粒細胞 ヲ散見スル外小滴狀又ハ細塵狀ノ脂肪ヲ間質細胞內及ビ間質細胞間ニ認ム. 月 經時剝離セル粘膜上層部ノ猶ホ子宮腔内ニ殘留セルモノニ於テハ多數ノ脂肪顆 粒細胞ヲ見ルホカ,小滴狀又ハ細塵狀ヲナセル脂肪ヲ脫落セル上皮及ビ間質細 胞内ニ證明シ得タリ。

經血中ノ股落組織片ニ於テハ上皮ハ腺管ヨリ股落シ間質細胞ト混在セリ,而シテ之等ノ細胞中ニハ其ノ胞核ノ崩壊セルモノ「ピクノーゼ」ノ現象ヲ現ハセルモノモ存ス,此間ニ多數ノ白血球,淋巴球及ビ赤血球ノ浸潤ヲ見ル,之等ノ腺細胞及ビ間質細胞ニ於テハ瀰漫性ニ小滴狀微細ナル脂肪顆粒ヲ著明ニ證明シ得又脂肪顆粒細胞ヲ多數ニ認ム。

更年期ノニ例中其ノー例ニ於テ間質ニ脂肪ヲ見タリ。

Aschheim ハ月經期ニ於ケル六例中五例ニ於テ上皮中ニ脂肪ヲ認メ月經ノ終末ニ近キ一例ニ於ラハ之ヲ見ズ,間質細胞中ニハ常ニ脂肪顆粒細胞及ビ脂肪微粒ヲ證シ得タリ,淺田氏又三例ノ月經期粘膜ニ於テ上皮竝ニ間質中ニ脂肪ヲ認メタリ。

二 通常子宫粘膜脂肪所見綜括

余ノ僅少ナル實驗例及ビ Aschheim ノ報告ヲ參照スルトキハ次ノ結論ヲ下シ得ペシ。

生體ヨリ得シ子宮粘膜ニテハ月經間期ニ於テ「アッオ」色素ニヨリ染色シ得ル 脂肪ヲ其ノ上皮中ニ約十乃至十三%間質ニ約六十%ノ割合ニ認メ得.

月經前期子宮粘膜ニテハ上皮中ニ約八十%以上, 間質ニ七十乃至七十五%, 月經時粘膜ニテハ百%, 上皮及ビ間質ニ脂肪ヲ認ム。

三 炎性子宮内膜ニ於ケル脂肪

Aschheim ハ少數ノ子宮內膜炎ニッキラ脂肪ヲ檢セルモ他ノ多數ノ病的狀態ニ於ケル子宮ト混合シラ其ノ成績ヲ發表シタレバ其ノ詳細ヲ知ルニ由ナク,淺田氏ハ三例ノ子宮內膜炎ニッキ脂肪ヲ檢シ結論トシラ炎性內膜ニ於テモ月經ノ正調ナル限リ週期的變化ニ影響ナク從ッテ其ノ脂肪含有ニ變化ヲ認メズト述べ

タリ.

Hueter 及ど Unterberger ガ寶質炎子宮筋層ニ於テ著明ニ脂肪ヲ證明セルコト ハ上述ノ如シ、足立氏ハ三十二例ノ成熟婦人子宮ニツキ重屈折性「リポイド」ヲ 檢シ、其ノ內三例ニ於テ其ノ粘膜ニ之ヲ證明シ得タリ、而シラ該三例中ノ一例 ハ寶質內膜炎子宮ナリシコトヲ記載セリ。

岩田氏ハ炎症性變化ヲ明ニセル五例ノ喇叭管ニツキ「ズダン」III ニョル染色 ヲ行ヒ各層ニ亙リ陽性ニシテ殊ニ月經後期ノ三例ニアリテハ全部中等度ニ脂肪 ヲ讃明セリ、

余ハ炎性子宮粘膜ニ關スル實驗例ヲ掲グルニ先チ,炎症ド「プラスマ」細胞ト ノ關係ニツキテ少シク述ブル所アラントス。

Hitschmann Adler ハ内膜炎ノ診斷ニ向ヒ「プラスマ」細胞及ビ浸潤細胞(Infiltrationszellen) ノ存在ヲ必要トシ R. Schröder 等ハ「プラスマ」細胞ヲ以テ必ズ シモ炎症ノ特産物トセズ通常子宮粘膜ニモ時ニ僅少ノ「プラスマ」細胞ノ出現ス ルコトアリト述ベタルガ,余モ亦炎症ナキ粘膜ニ於テ其ノ血管壁ニ沿ヒ極僅少 ノ「プラスマ | 細胞ヲ認メシ例ヲ有ス, R. Schröder ハ通常子宮粘膜ニ圓形細胞 **小少量ニ瀰漫性ニ存スルモ之ガ多數ニ現ルル場合又ハ竈狀ニ出現シ同時ニ多數** ノ「プラスマ 細胞ヲ認ムル時ハ炎症ヲ起セリト稱スベク刺戟性加答兒ニ於テハ 時ニ「プラスマ」細胞ヲ缺グコトヲ述ベタリ,Schridde ハ化膿性喇叭管炎ノ膿 中ニ「プラスマ」細胞ヲ證明セルトキハ之ヲ淋毒性ノモノトナスベキコトヲ揚 言セルモ Weishaupt ハ炎性反應ヲ呈セル殆ド總テノ組織ニ「プラスマ」細胞ヲ **證明シ得ルコトヲ述ベ筋腫,通常子宮粘膜及ビ血管腫,多クノ癌腫ニ於テ時ニ** 僅カニ認ムルコト,膣部癌腫ノ反應層,息肉,殊ニ漿液性浸潤ヲ伴ヘル炎症ノ 場合多數ニ現ルルコト及ビ淋毒性傳染ノ時ハ特ニ多數ニ出現スルコトヲ記載セ り. Millrer ハ Schridde ノ説ヲ反駁シ結核性及ビ淋毒以外ノ他種炎症性喇叭管炎 ニモ「プラスマ」細胞ヲ證明シ得ルコト及ビ他ノ生殖器結核,子宮膣部,頸管ノ 腺性息肉,子宮癌ノ間質ニ於ケル炎症性浸潤部,子宮膣部ノ糜爛, 喇叭管水腫, 喇叭管妊娠等ニモョク「プラスマ 細胞ヲ證明シ得ルコトヲ流べ、喇叭管ニ於ケ ル「プラスマ」細胞ハ淋毒性傳染ニ特有ナルモノニアラズ,タダ該「プラスマ」細 胞ヲ缺グ時ハ淋毒性傳染ヲ否定シ得ベシト記述セリ、余モ又癌子宮ノ反應性炎 症層ニ多數ノ「プラスマ |細胞ヲ證明シ得シ例ヲ有ス。

尚非子宮內膜炎ト粘膜ノ週期的變化ニツキ聊カ述ベントス, Ruge ハ子宮內膜炎ヲ腺性內膜炎,間質性內膜炎及ビ此兩者ノ併發セル場合ノ三者ニ區別セルモ Hitschmann, Adler ハ子宮粘膜ノ炎症ニハタダー種卽チ間質性內膜炎ノミ存スルコトヲ唱道シ從ツラ單ニ子宮內膜炎トハ間質性炎症ヲ意味シ Ruge ノ腺性內膜炎ハ週期的變化ヲ呈セル子宮內膜ニ外ナラザルコトヲ述ベタリ。其ノ後多數ノ學者ニヨリラ研鑽セラレ今ヤ Hitschmann, Adler ノ説ハー般ニ承認セラル,而シラ同氏等ハ炎症ノ診斷ニ向ヒ浸潤細胞及ビ「プラスマ」細胞ノ必要ナルヲ高唱セルコトハ上述ノ如シ。

淋毒傳染後ノ粘膜週期的變化ニッキ R. Schröder ニ從フ時ハ粘膜ニ感染後, 次囘ノ月經時ニハ粘膜機能層ノ剝離通常ノ如ク上層焮衝セル組織ノ一部排出セラレ遺殘セル基底層ニ於テ程ナク强キ白血球ノ浸潤ト多數ノ「プラスマ」細胞ヲ認ム,今ヤ増殖期ニアタリ基底層ノ强キ障碍及ビ傳染ニ對スル防禦作業ノ為機能層ノ再生ハ全ク缺損スルカ又ハ甚が微弱ナリ,即チ甚ダシク罹炎セル基底層ハ卵巢「ホルモン」ニ反應セズ腺増殖又甚が微弱上皮ノ増生又缺グ,カカル狀態ニテ數週間ヲ經過スル內焮衝ヲ起セル粘膜ハ漸衣恢復シ卵巢「ホルモン」ニ反應スルニ至ル,而シテ六週乃至八週後ニ眞ノ機能層再ビ發生ス,此時期ニハ腺管ハ普通ノ狀態ヲ呈シ間質ニ於テ向ホ多數ノ圓形細胞及ビ「プラスマ」細胞ヲ認ムト雖モ表層ニ於テハ多クノ場合已ニ之等細胞ヲ證明シ難シ。

其ノ後ノ週期的變化ニアタリ即チ感染後一箇月乃至數箇月ノ後瀰漫性浸潤其 ノ影ヲ沒シ僅ノ圓形細胞及ビ「プラスマ」細胞淋巴管周圍ニ殘留シ炎症ノ將ニ經 過セントスルコトヲ示ス,今ヤ子宮淋疾ハ殆ド全治セリト稱スベク基底層ニ於 ケル病竈モ程ナク消失ス。然レドモ喇叭管及ビ腹膜ニ於ラハ慢性炎症持續性ニ 殘存シ之等ノ部ニ於ケル炎症機轉增悪シ又ハ頸管腺内ニ鼠入セル病原菌ニヨリ 粘膜ノ再傳染ヲ起セル場合上記ノ經過ヲ反覆ス。

慢性ニ長時日間持續セル內膜炎ハタダ甚ダ重症ナル場合ニ存スルノミ, 即チ臨牀的ニモ之等ノ場合長ク持續スル子宮出血ヲ訴へ多クハ障碍セラレタル又ハ全ク缺損セル卵巢週期(Ovarialzyklus)ヲ證明シ得, カカル場合粘膜ノ週期的變化ハ長ク障碍セラル。

余/以下述ブル實驗例ニ於ラモ炎症/爲粘膜/厚徑常ニ薄キヲ認メタリ,而 シラ實驗炎症粘膜九例中六例ハ剔出子宮ヨリ,三例ハ內膜搔爬術ニヨリ得シモ ノナリ,一般ニ子宮全剔出又ハ掻爬手術ハ多ク月經間期ニ行ハル而シテ余ノ例 ハ總ラ偶然ニモ月經間期ノ粘膜ニ屬スルモノナリ,

イ 實驗例

第一例、患者 M. H. 三十歳ノー婦人生來健康ナリ月華十四歳ニテ始マリ初メ正常ナリシモ十二年以來不順ニシテ十四日乃至二十一日毎ニ反覆シ三乃至五日間持續ス十二年前淋疾及ビ黴毒ニ侵サレ八年以來喇叭管膿腫ニ惱ム、最終月經二月十九日ニ始マリ三月二日迄持續ス、三月十一日フライブルグ大學附屬醫院婦人科ニテ開腹、兩側附屬器チ剔出シ子宮チ膣上部ニテ截断セリ

最終月經ハ月經過多症ノ狀態ニテ現ハレ月經開始後二十一日チ經過セル粘膜ナリ.

顯微鏡所見. 粘膜 ^ 炎症ノ為厚徑甚ダ少シ、「プラスマ」細胞表層ニ多數ニ存ス、 圓形細胞及ビ白血球 又主トシテ表層ニ存スルモ中層及ビ深層ニ於テ所々ニ圓形細胞ノ竈狀ニ群レルモノテ見ル.

表層間質二於テ特=多量ノ脂肪チ見ル、該脂肪ハ小滴状又ハ綱顆粒チナシテ脳質細胞内ニ存スルモ亦 細塵状又ハ小滴トナリ間質細胞間ニ出現セルモノアリ、腺上皮及ビ表層上皮ニ於テ所々ニ滴状「リポイド」チ見ルモ甚ダ僅少ナリ又腺腔内ニ於テモ僅ノ脂肪滴チ認メ得ルモノアリ、脂肪顆粒細胞ハ殆ド之チ 認メブ、間質ニ於ケル脂肪ハ特ニ腺管周圍ニ著シキ沈着チ見ル。

第二例. 患者 M. Z. 二十五歳ノ一婦人生來頑健ナリ十五歳ニテ月經開始シ初メ正常ナリシモ近時不規 則ニシテ二十一日乃至二十八日毎ニ反覆シ三乃至六日間持續シ其ノ量甚ダ多シ、一週間前迄約七日間持 續セル出血アリ、二十二歳ニテ結婚シ其ノ夫ハ淋疾ナ有ス未ダ分娩セルコトナシ.

最終月經三月二日、三月十七日月經不順ノ為內膜搔爬手術ナナス、 即チ最終月經開始後十七日テ經過セルモノナリ.

顯微鏡所見 「プラスマ」細胞散在性ニアリ圓形細胞甚ダ多數ニシテ所々ニ竈狀ニ存ス.

関質細胞內ニ多數ノ小滴又ハ細塵状脂肪 チ認ム, 関質細胞間ニ於テモ微細脂肪滴チ證明シ得又脂肪類 粒細胞ノ散在セルチ見ル, 腺上皮ニ於テハ脂肪ハ爛漫性ニ網額粒トナリ存シ腺腔ニ向ヘル部ニ於テモ之 チ認ム,表層上皮ニ於テ瀰漫性ニ脂肪顆粒ノ存セル所アリ, 所々ノ腺腔ニ脱落上皮及ビ微細脂肪滴チ見ル.

第三例. 患者 M.O. 三十歳ノー婦人十八歳ニテ月經開始シ初メ正常ナリシモ近時不規則ニシテ二週 乃至四週毎ニ反覆ス、三箇月以來特ニ不順ニシテ七日乃至十日間持續ス、二十四歳ニテ結婚セルモ未ぞ 分娩セルゴトナシ、夫ハ花柳扇ノ既往症テ有ス。

最終月經四月二十日,四月二十八日內膜搔爬手術ヲ爲ス,月經開始後九日ヲ經過セル內膜ナリ.

顯徽鏡所見. 子宮粘膜ハヤヤ腺管ニ富△、「プラスマ」細胞ハ散在性ニ存シ多數ノ圓形細胞及ビ白血球ノ竈狀群ナ所々ニ見ルモ亦圓形細胞ハ瀰漫性ニ存ス.

脂肪 / 間質全般ニ認メ得ルモ、粘膜表層及ビ中層ニ特ニ著明ナリ、小顆粒トナリテ間質細胞體内ニ現レ又微小ナル滴状トナリテ細胞間ニ存スルモノアリ、除上皮、表層上皮及ビ腺腔ニ於テ「リポイド」 チ認メズ所潤脂肪額粒細胞 / 甚ダ僅ニ之チ見ル.

第四例. 患者 J. W. 四十三歳ノー婦人生來健康ニシテ蓍患ヲ知ヲズ, 二十二歳ニヲ結婚シ, 三囘分

娩セリ、十五歳ニテ月華初メテ開キ爾來正常ニシテ二十八日毎ニ反覆シ五日間持續セルモ二箇月以來不順ニシテ時々子宮出血チ訴フ.

最終月經六月二日ヨリ六日迄持續セリ.

六月九日内膜攝爬手術ヲ爲ス即チ月經開始後八日ヲ經過セル例ナリ.

顕微鏡的所見、「プラスマ」細胞散在性ニ存ス、所々ニ濾胞様ニ集レル淋巴球ノ群チ見ル、又瀰漫性ニ 国形細胞及ビ白血球チ認ム、 関質細胞及ビ間質細胞間ニ於テ中等度ニ微細脂肪滴チ見ル、腺上皮ニ於テ ハ極僅ニ脂肪ノ存在チ認メ得

第五例 患者 F. R. 二十五歳ノー婦人十四歳ニテ月率開キ初メ正常ニシテ四週週毎ニ反覆セルモ近時不規則トナリ二十一日毎ニ反覆シ、六乃至七日間持續ス、月經時腰部及ビ下腹部ニ微痛ヲ訴フ、二年以來兩側喇叭管炎ニ惱ム、最終月經八月九日

八月二十六日兩側附屬器腫瘍ノ診斷ノモトニ開腹、兩側附屬器ト共ニ子宮チ膣上部切斷術ニヨリ剔出 セリ、本例ハ最終月經開始後十八日チ經過セルモノナリ.

顯微鏡的所見、粘膜ハ炎症ノ為再生力微ニ厚徑甚ダ少シ,全般ニ亙リ多數ノ「プラスマ」細胞チ見ル, 又所々二竈狀ヲ為セル圓形無胞群ヲ認ムル外瀰漫性ニ白血球及ピ圓形細胞存ス. 又深部ニ濾胞擦状態ヲ 呈セル淋巴球ノ集團ヲ見ル.

表層上皮中ニ瀰漫性ニ微細脂肪滴ヲ見ヰ, 間質細胞內及ビ間質細胞間ニハ微小滴又ハ細塵様狀態ヲナシヲ存ス, 又所々ニ脂肪顆粒細胞散在ス, 腺上皮中ニモ極微ニ存セルモノアリ, 腺腔内ニ脱落上皮及ビ白血球ヲ時ニ證明シ得.

第六例. 患者 M. S. 二十一歳ノー婦人生來預健ナリ十六歳ニテ月經開始シ,初メ正常ナリシモ三年 以來不正トナリ二十一日乃至二十八日毎ニ反覆シ常ニ月經過多ま訴フ, 數年來淋疾ノ傳染チウケ兩側附 屬器炎ニ惱ム,最終月經八月十一日,八月二十六日開腹兩側附屬器ト共ニ子宮ま剔出セリ.

顕微鏡的所見、粘膜ノ發育ヤヤ可良ナリ、「プラスマ」細胞及ビ白血球チ全粘膜ニ亙リ廣ク見ル又小圓 形細胞モ之チ著明ニ認メ得、多數ノ脂肪顆粒細胞チ見ル、間質細胞ニ於ケル脂肪ハ小滴状チナシテ存ス 又間質細胞圓ニ微小脂肪滴及ビ細塵燥脂肪チ認ム、腺上皮、表層上皮ニ於テハ微細顆粒トナリ瀰漫性ニ 存む腺上皮腺腔側ニモ脂肪チ認ム、腺腔ニ於テ極微ニ游離脂肪存み

第七例. 患者 W. K. 三十歳ノー婦人二十五歳ニテ結婚ス、月經十四歳ニテ開キ初メ正常ナリシモ數年以來稍々不規則トナル、二十八日毎ニ反覆シ四乃至六日間持續ス、月經前僅ノ疼痛ヲ兩則腹部ニ訴フ最終月經七月二日ヨリ五日迄持續ス、右側喇叭管炎ノ診斷ノモトニ七月十二日開腹、右側附屬器及ビ全子宮ヲ剔出セリ、本例ハ最終月經後十一日ヲ經過セルモノナリ.

顯微鏡的所見、「プラスマ」細胞及ビ圓形細胞チ瀰漫性ニ見ル,表層上皮及ビ腺上皮ニ於テ胞核チ続リ 瀰漫性ニ縄小ナル脂肪顆粒チ認ム,腺上皮ニ於テハ腺腔ニ向へル側ニモ存ス,間質ニ於テハ粘膜深部ニ 於テヤヤ僅少ナル觀チ呈スルモ,間質細胞ニ於テ瀰漫性ニ微小顆粒チ見ル又所々ニ滴状脂肪チ有セル細 胞存ス,細胞間ニテハ細小滴状义ハ細塵狀脂肪チ認ム,腺腔内ニ游離脂肪滴及ビ白血球ノ脂肪チ有セル モノアリ. 第八例 患者 M. F. 三十四歳ノー婦人生來健全ナリ十五歳ニテ月經開始シ初メ正常ナリシガ約一年 中以來不規則トナル二十八日毎ニ反覆スルモ子宮出血ナ時ニ起シ又月經過多症チ訴フ, 二十六歳ニテ結婚シ其ノ夫ハ嘗テ花柳病ニ罹レルコトアリ, 昨年以來兩側喇叭管炎ニ惱ム, 最終月經六月二日ヨリ七日 迄.

六月十七日開腹、膣上部切断法ニョリ子宮及ビ兩側附屬器チ剔出セリ、本例ハ最終月經開始後十八日 チ經過セルモノナリ.

顯微鏡所見 「プラスマ」細胞散在性ニ存シ圓形細胞及ビ白血球散在性ニアルモ亦鑑狀圓形細胞群チ所所ニ見ル, 関質細胞及ビ間質細胞間ニ微小脂肪顆粒又ハ細粉狀脂肪滴トナリ多量ニ存み, 腺上皮及ビ表層上皮ニ脂肪チ認メズ, 所謂脂肪顆粒細胞又甚ダ僅少ナリ, 腺腔ニ於テハ白血球, 僅ノ脫落上皮チ認メ得.

第九例 患者 M.S. 二十五歳ノー婦人天稟羸弱ニシテ目下肺尖加答見ニ惱ム,十八歳ニテ月華開始シ 初メ正常ナリシガ近時不規則トナリ,子宮出血及ビ月經過多症ヲ訴フ,内診ニョリ左側ニ小兒頭大ノ卵 巣癰腫右側附屬器ニ又種物ヲ觸知シ得.

七月五日開腹、左側囊腫、右側喇叭管ト共ニ子宮ヲ剔出セリ.

顯微鏡的所見。實驗例九例中唯一ノ結核例タリ、粘膜、炎症ノ為厚徑甚ダ少シ、表層ニ於テ乾酪樣變性運力見ル[オキシダーセ]反應ニョリ著明ナル白血球ノ浸潤チ證明シ得、白血球、乾酪樣變性チ替メル部ノミナラズ又深層ニ於テモ之チ認メ得、小圓形細胞又竈狀チナシ多數ニ存シ、巨大細胞チ所々ニ散見ス乾酪懷變性チ替メル部ノ「リポイド」、次多のハ網塵狀又ハ微細顆粒狀チナシ瀰漫性ニ存ス、 間質細胞ニ於テモ微細顆粒狀チナシテ顯レ細胞間ニモ亦細粉狀又ハ細塵狀チナセルモノヲ認ム、多數ノ腺裝置ハ破壊セラレタルモ亦健存セル腺上皮ニ於テ極メテ僅ニ脂肪ヲ證明シ得ル所アリ.

ロ 炎性子宮粘膜ニ於ケル脂肪所見綜括

上記九例中八例ニ於テハ著明ニ「プラスマ」細胞及ビ圓形細胞白血球ヲ證明シ得シモノニシラ第九例ハ粘膜ニ於テ結核性乾酪樣變性竈及ビ巨大細胞ヲ確證セリ、材料ハ何レモ新鮮ナルモノヲ用井剔出後直ニ之ヲ固定セリ、月經週期トノ關係ハ偶然ニモ八例トモ月經間期ニ當リ最終月經開始後第八日ヨリ第二十一日迄ノ間ノモノナリ、最後ノ結核例ハ最終月經不明ナリキ、而シテ九例トモ間質ニ於ラ常ニ多量ノ「リポイド」ヲ證明シ、多クノ場合微小顆粒狀ヲナシテ細胞内ニ核ヲ圍ミテ存シ、間質細胞間ニテハ細塵狀又ハ細粉狀トナリラ出現セリ又所所ニ脂肪顆粒細胞ヲ認ム、【第三圖參照】表層上皮及ビ腺上皮ニ於ラ脂肪ノ存セザリシモノハ二例ニシテ他ノ七例ハ皆多少ニ之ヲ有セリ、上皮内ニ於テハ脂肪ハ瀰漫性ニ微細顆粒狀ヲナシテ存シ腺腔側ニモ證明シ得而シテ月經前期粘膜ニ於ヲ主トシラ腺細胞基底部ニ大顆粒狀又ハヤヤ大ナル滴狀ヲナシラ存セルモノ

【第四圖參照】トハ大ニ趣ヲ異ニス.

之ヲ要スルニ炎症ヲ起セル子宮粘膜間質ニ於テハ常ニ「シャルラッハロート」ニョリ染色スル多量ノ脂肪ヲ證明シ得,而シテ上皮ニ於テモ通常子宮粘膜月經間期ノモノニ比シ遙ニ多數ノ率ニ於ラ脂肪ヲ證明シ得タリ,上述ノ如ク通常子宮粘膜ノ月經間期ニ於ケル脂肪含有率ハ Aschheim 及ビ余ノ例ニ於ラ共ニ間質ニ約六十%,上皮ニ約十乃至十三%ナルニ炎症ヲ起セル粘膜ニテハ其ノ全例ニ於ラ間質ニ著明ナル脂肪沈著ヲ示セリ。

四 通常子宮粘膜及ビ炎性子宮粘膜ニ於ケル脂肪ノ意義

「リポイド」ノ成熟婦人子宮粘膜ニ現ルルハ多クハ月經前期及ビ月經期ニシテ 此兩期ニ於テハ特ニ多クノ脂肪ヲ其ノ上皮中ニ證明シ得,月經後,月經後期ニ 移行スルト同時ニ該「リポイド」ハト皮ヨリ消失シ、其ダ稀ニ月經間歇期ニ於テ 上皮中ニ脂肪ヲ認メ得ルコトハ余ノ例ニ於テモ淺田氏, Aschheim 等ノ成績ト殆 ド同一ナル結果ヲ得タルガ R. Schröder ハ月經時及ビ月經前期ニ上皮中ニ現ハ ルル脂肪ハ變性現象ナリトセルモ Aschheim 等ハ月經前期ニ於ケル上皮中ノ脂 肪ヲ以ヲ細胞内=於ケル亢進セル物質代謝ノ組織化學的=證明シ得ル表徴=外 ナラズトナシ,氏ハ更ニ妊娠時ノ子宮粘膜ヲ檢シテ其ノ落脫膜細胞中ニ多量ノ 脂肪ヲ發見セル事實ョリシテ恐ラク之等「リポイド」ハ「グリコゲーン」ノ如ク胎 兒ノ榮養ニ向ヒラアル意義ヲ有スルモノナラントセリ. 然り月經前期ニ於ケル 上皮中ノ脂肪ハ或ハ Aschheim ノ所説ノ如クナラン。O. Lubarsch ハ炎症ノ三 大症候トシテ變質 (Alteration), 浸出 (Exsudation), 增殖 (Proliferation) ヨアゲタ リ,炎症子宮粘膜特ニ間質ニ殆ド必發性ニ證明シ得ル脂肪ハ充血及ビ細胞障碍 又ハ變性ノ爲起リシモノナルコトハ何人モ肯定スル所ナルベシ, Munk ハ「リポ イド」變性ナル題名ノモトニ脂肪變性ハ細胞ノ機能障碍又ハ細胞死滅ノ表徵タ ルコト,重屈折性物質ノ發顯ハ核融解ヲ意味スルコト及ビ重屈折性物質ハ恐ラ ク「ヒヨレステリンエステル」ナルコトヲ記載セリ, Aschoff 氏及ビ川村氏ハ炎 症ノ際一般ニ,急性ノ時ハ「リポイドヲ」沈著シ, ソガ慢性ニ經過スル場合ニハ 漸次中性脂肪ヲ増加シ遂ニ「コレステリンエステル」ヲ多量ニ證明シ得ルコトヲ 述ベタリ.

余!例=於テ月經前期通常子宮粘膜ノ腺上皮基底部=現 レシ「リポイド」ハ名

クノ場合中等大ノ滴狀ヲナシ、極メラ活氣アル狀ヲ呈セルモ、炎症粘膜ノ間質 ニ現レシ脂肪ハ槪シラ微細ナル滴狀ヲナシ瀰漫性ニ細胞内ニ存セリ.

Munk ニョレバ「リポイド」検索ニアリラハ種々ナル染色法ニョリ重屈折性ョ 亡失スル恐レアリ,是が検出ニハ常ニ一枚ノ新鮮ナル不染標本ヲ用キルヲ要スト,余ノ例ニ於テハ新鮮ナル狀態ニ於ラ重屈折性物質検索ノ機會ヲ失ヒ染色標本ニテハ之ヲ検出シ能ハザリキ。

尚 本 炎症 竈 ニ 於ケル 脂肪 ニッキテハ後日更 ニ 詳細 ニ 檢スル 所 アラントス.

五 結論

- 1. 生體ョリ得タル成熟婦人通常子宮粘膜ニ於テハ「アッオ」色素ニョリ染色シ得ル脂肪ヲ月經間期ニ於テ其ノ上皮中ニ約十乃至十三%,間質ニ約六十%. 月經前期子宮粘膜ニテハ上皮中ニ約八十%以上,間質ニ七十乃至七十五%.月經時粘膜ニテハ上皮間質共ニ百%證明シ得.
- 2. 炎性子宮粘膜ニテハ其ノ間質ニ於テ常ニ著シキ脂肪沈著ヲ見ル該脂肪ハ 多クノ場合瀰漫性ニ微細ナル滴狀又ハ細粉狀ヲナシテ存ス。
- 3. 炎性子宮粘膜間質ニ於ケル脂肪沈著ハ充血及ビ細胞障碍又ハ變性ニ基因 スルモノナルペシ。

第二章 掻爬手術後ノ再生子宮内膜ニ就キテ

一緒言

播爬手術後ノ再生內膜ニッキテハ Richard Werth, Julius Richter 等ニョリ夙ニ詳細ニ記載セラレシ所ナリ, Werth ハ搔爬後種々ノ間歇ヲ置キラ剔出セル五例ノ子宮ニッキ Richter ハ十八例ニッキ搔爬後第一日ョリ第二十六日ニ至ル種種ノ間歇ニ於ラ子宮ヲ剔出シ組織的檢索ヲ行ヒ其ノ成績ヲ發表セリ。

Richter ハ掻爬ノ程度ョニ様ニ別チ其ノーッハ粘膜層ノ全部ョ强ク掻爬セルモノニシラ最早子宮腔内ニ於ラ遺殘粘膜ヲ認メザル場合ト、他ノーッハ搔爬ノ程度ヲ稍輕クシ粘膜ノ僅少部分ハ猶ホ殘留セシメシ場合ナリ、然レドモ同氏ハ前者ニ重キョ置ケリ、今同氏ニ從ヒ再生新粘膜間質組織ノ概要ヲ述ブレバ欠ノ如シ。

掻爬手術後二十四時間經過セル頃ニ於テハ新創面ハ繊維素層 (Fibrinschicht)

ニラ被覆セラレ 初散在性ニ白血球ヲ見ルモ漸次其ノ數ヲ増加シ創面ニ列狀又ハ網狀ヲナシラ存スルニ至ル、カクラ程ナク上皮ニヨリ被蓋セラレシ部分ヲ散見ス、之等被蓋上皮ハ筋層內ニ遺留セル腺管殘部又ハ殘留上皮ニ其ノ源ヲ發セルモノニシラ表面ノ凹凸ニ從ヒ多少其ノ形狀ヲ異ニスルモ、多クハ骰子形又ハ扁平ナル形ヲ有ス。

第三日ニ於テ創面底部筋繊維及ビ結締組繊維間ニ多核白血球ノ外ニ大ナル紡錘形ヲナシ原形質ニ富有セル胞體ヲ有シ比較的透明ナル胞核及ビ著明ナル核小體ヲ藏セル細胞即チ「フィブロブラステン」ヲ認ム、之等細胞ハ「カリオキネーゼ」ニヨリ遺残セル結締組織細胞ヨリ成立セルモノナリ、カクテ「フィブロブラステン」ハ速ニ増殖シ肉芽組織ノ發現ヲ來ス、該組織内ニ吾人ハ薄壁ノ比較的高キ內皮ヲ備ヘタル種々ノ口徑ヲ有スル血管ヲ見ル、又アル部ニ於テハ多クノ內皮細胞ノ集合ノミヨリナレル血管ノ新生狀態ヲ認メ得、カクラ生ゼル胚芽組織ノ内ニ細繊維出現シ、終ニ血管ニ富メル結締組織成立ス、本組織內ニ於ケル結締組織維ハ時ニ密ナル時ニ鬆粗ナル網狀構造ヲ呈ス則チ Richter 氏ハ肉芽組織ヲ以テ搔爬手術後最初ニ現ハルル補充組織トナシ該組織ヨリシラ漸大粘膜固有層ニ於ケル間質結締組織發生スルコトヲ唱道シ、搔爬後內膜間質組織ノ新生ニの前階級組織トシラ肉芽組織ノ必要ナルコトヲ高唱セリ、尚ホ同氏ハ被蓋上皮ハ通常搔爬後第三日ニ於テ再生開始シ淺在性搔爬創ニ於テハ第五日ニ深部、搔爬創ニ於テハ第九日ニ完成スルコトヲ記載セリ・

Werth 氏亦新被蓋上皮ハ再生シッツァル粘膜腺上皮ョリ發シ,腺管開口部ョリ連續的=表層=擴延コルコトヲ述ベ搔爬後第五日=於テ新創面ハ全ク被覆セラルルコトヲ記セリ、尚ホ同氏=從フ時ハ搔爬後ノ子宮粘膜=於テハ上皮ノ定型(Formbeständigkeit)ヲ缺グコト多クアルー定範圍=於テハ定型性細胞存スルモ他ノ部=於テハ種々ノ異常形細胞相錯雜シ低キ扁平上皮ノ外=屢「レンス」狀又ハ三檣狀(Dreimasterformen)ヲナセルモノ現ハル,又時=大ナル胞核及ビ大ナル胞體ヲ有スル重層上皮及ビ空胞(Vakuolen)ヲ有スル上皮出現スルコトアリ,該空胞上皮胞核ハ中央ョリ半月狀ニ細胞壁ニ押壓セラル,又上皮細胞内ニ於テ,時ニ大ナル褪色セル水腫樣變性ヲ營メル胞核ヲ認ムルコトアリ,而シテWerth 氏ハ以上ノ事質ョリシテ存續被蓋上皮ノ發顯ニハ表層上皮内ニ於テー代又ハ數代ノ世代輪廻(Generationswechsel)行ハルルモノナルコトヲ述ベタリ・

尚示此機會ニ産褥子宮ニ於ケル上皮再生ノ狀態ニッキー言スレバ Schauta ハ 脱落膜ノ遺残セル程度ニョリ産後ノ子宮粘膜再生速度ニ差異アリ、アル部分ハ 三週ノ後、他ノ部分ハ四乃至六週ノ後再生スルコトヲ述べ、Bumm ハ産後子宮 粘膜ハ第十八日ニテ上皮ニョリ被覆セラルルコトヲ記載シ、Wheeler ハ三週ノ後、Kohlweiss ハ四週ノ後被蓋セラルルコトヲ記述セリ・

再生粘膜腺管ニッキラ略述センカ Werth 氏ニ從フ時ハ搔爬後ノ再生粘膜ニ 於テ新生表層上皮ニ源ヲ發セル腺管ノ新生ヲ見ズ、腺再生ハ舊腺ノ残留部ノミョリ生ズ從ツラ腺ノ發育ハ遠心性方向ニシラ粘膜再生ノ初期ニ於テハ腺管ノ表層上皮開口部ニ近クニ從ヒ該腺上皮ハ扁平トナルコト恰モ表層新創面が圓柱上皮ニョリ被覆セラルルニ當リ新ニ生ゼル邊縁部細胞ハ中央部ニ於ケルモノニ比シ其ノ高徑常ニ少ナキト同ジ、カクラ再生子宮粘膜腺ニ於ケル上皮細胞ノ高徑ハ腺底部ニ於ラニ十五「ミクロン」ナルニ開口部ニ近クニ從ヒ六「ミクロン」ナル如キ場合モ存ス。

新生セル幼弱腺管ノ定型性形狀トシテハ粘膜筋層境界部ニ存スル腺管殘留部 ニ起始シ表層迄眞直ニ走レル單純ナル管腔ヲアグベキモ,尚ホ種々ノ變形ヲ見 ル,コハ腺管ト間質相互間ノ均衡不充分ニ基クコト多ク,普通粘膜ニテ通常見 難キ腺形即チ多數ノ開口部ヲ有セルモノ盲端ノ肉叉狀ニ終レルモノ等現ハルル コトアリ.

然レドモ掻爬手術後,腺ノ遺髪セルモノナキ部ニ於ラハ腺管ハ如何ニシテ成立スルヤ,Richter ハ强ク掻爬セル場合第二十六日ニ於ラモ猶ホ腺管ヲ認メ得ザリシ例ヲノベ,カカル場合所々ニ表層上皮ノ間質組織内ニ陷入シッツアル部ヲ認メ,此陷入部ハ腺發生ノ初部ト看做シ得ベク此際腺管ハ水心性方向ニ發育スルモノナルコトヲ記載セリ,Kundrat ハ分娩第一年ニ於ラ表層上皮ノ陷入ニョリ子宮腺ノ發成スルコトヲ述ベ Nagel, Polano, Marchand 又表層上皮ョリ腺ノ再生スルコトヲ記述セリ.

次ニ述ブルー項ハ再生粘膜ノ組織的檢索トハ直接關係ナキモ搔爬手術後ノ新 生粘膜ト月經トハ如何ナル關係ニアルヤヲ明ニセンガ爲摘錄セリ。

林敏郎氏へ四百六十五例ノ患者ニッキ月經間歇期間ノ種々ノ時期ニ於テ、內 膜搔爬術ヲ行ヒ以テ次回ノ月經ニ及ボス影響ヲ臨牀的ニ觀察セリ而シテ同氏へ 月經最終日ヨリー週間乃至四週間以內ニ搔爬ヲ施行セルモノニアリテハ、各場 合ニ就テ常態無影響ノ者六十%內外ナリ.搔爬ノ影響ヲ受ケタルモノニ就テ觀 察スルニ,月經最終日ヨリー週間乃至二週間以内ニ於ラ搔爬ヲ施行セルモノニ アリラハ其ノ影響ノ狀熊略々相似ラ、早發ノモノ可ナリ多數ヲ占ノ、遅發ノモ ノ少數ナリ. 第三週目ニ於ケル搔爬ノ影響ハ早發ノモノヲ著シク減少セシメ, 反之遲發殊ニー乃至二週間以內 / 遲發ヲ著シク増加セシム.第四週目卽チ月經 來潮前 (Praemenstruell) ニ於ケル搔爬ハ早發ノモノヲ尚ホ著シク減少セシメ遅 發二乃至三週間以内ノモノヲ著シク増加セシムルヲ見ル. 第五週目ニ行ヘルモ ノニ於テハ常態ニ來ルモノ著シク減ジ,早發ノモノ皆無ニシテニ週間以內遲發 ノモノ多數ヲ占ムルニ至ル。第六週目施行ノモノニ於テハ常態ノモノ皆無,三 週間遲發ノモノ最多ナリト述べ、結論トシラ曰ク搔爬ノ時期ガ月經終止ニ近キ (Postmenstruell)時期ニ行フ時ハ次囘月經ノ來潮期ノ早發ヲ促シ,搔爬ノ時期ガ 次囘月經來潮期 = 近キ (Praemenstruell) 時ハ其ノ月經ノ遲發ヲ來ス傾向ヲ有ス ルガ如シ、然レドモ約半數ニ於テハ搔爬占期ノ如何ニ拘ハラズ常ニ次囘月經ノ 來謝期ニ無影響ナリ,因ニ同氏ハ日本婦人二百六十七名ニツキ月經間歇期間及 ビ月經持續時間ノ統計ヲトリ間歇期ノ標準ヲ三十三日,持續日數ヲ四,五日ト 定メタルモノナリ,然レドモ同氏ハ月經後粘膜ノ再生狀態ニツキテハ何事モ論 及セザリキ。

二 實驗例

余ハ<u>ブライブルグ</u>滯在中,同地大學附屬醫院婦人科ニラ內膜搔爬手術後種々 ノ間歇ヲ置キラ剔出セル四例ノ子宮ヲ得,其ノ新粘膜再生力ニツキ特ニ注意ス ベキ點ヲ認メタレバ次ニ其ノ概要ヲ述ベント欲ス。

材料、子宮剔出後直ニ其ノ前面ニ縦切開ヲ加へ、之ヲ十%ノ「フォルマリン」中ニ固定シ後、子宮體部數箇所ヨリ粘膜ヲ筋層ト共ニ切除シ其ノ一部ハ凍固「ミクロトーム」ニテ切片トナシ之ニ Bielschowsky-Maresch ノ鍍銀法ヲ行ヒ、他ノ一部ハ「バラフィン」切片トナシ、「ヘマトキシリン」「エオデン」染色ヲナセリ、

第一例. 患者 S. M. 三十六歳ノー婦人常ニ健康ニテ著患ヲ知ヲズ十五歳ニテ月華開キ最初ハ不規則ナリシモ、数年來正常ニシテ二十八日毎ニ反覆シ四日間持續ス、二十四歳ニテ結婚シ未ダ分娩セルコトナシ、最終月經開始後第五日ニ於テ癌璽ノ疑診ノモトニ子宮膣部ノ試験的切除ヲ爲シ、同時ニ內膜搔爬手術ヲ行ヘリ、其ノ後滿十二日ヲ經テ開腹術ニヨリ子宮及ビ全附屬器ヲ剔出セリ.

肉眼的所見. 剔出セル兩側卵巣ニ變化ナシ、子宮ハ普通ノ大サチ有シ、膣部ニ僅ニ癌性變化チ認メ得.

體部粘膜ハ甚ダヨク發育シ其ノ厚徑五粍ヲ算ス.

顯微鏡的所見。子宮體部粘膜表面ニ於テ重層チナセル上皮チ見ル、上皮ノアルモノハ空胞(Vakuolen) サ有セルモノアリ、空胞上皮胞核ハ牛月狀チナシ細胞壁ニ押壓セラル、又上皮間所々二大ナル胞體及ビ 胞核チ有スル細胞チ認メ得、腺管ノ發育一般ニ可良ナリ、間質ニ存スル結締組織繊維ノ中、特ニ粘膜表 層ノモノハ甚ダ繊細ニシテ非常ニ鬆粗ナル網眼チ作り、腺基底部表層上皮下及ビ血管周圍ニ於テハ比較 的緻密ニ存スルコトチ認メ得、関質結締組織細胞ニ於テ「ミトーセ」ノ現象チ呈セルモノアリ又若キ血管 チ所々ニ見ル

第二例 患者 F. B. 四十歳ノ一婦人生來頑健ニシテ十五歳ニテ月經開始シ,四週毎ニ反覆ス,其ノ持續ハ通常四日間ナリ,二十三歳ニテ結婚シ,爾來二兒ヲ擧ケ,最終月經開始後第十五日ニ於テ攝爬手術ヲナシ,更ニ十一日ヲ經テ左側卵巢癌ノ経診ノモトニ開腹。全子宮及ビ兩側附風器ヲ剔出セリ・

肉眼的所見。左側卵巢ハ鷲卵大ニシテ、右側卵巢及ビ兩側喇叭管ニ變化ナシ、子宮粘膜ノ發育不良ニシテ厚徑→•五耗ナ簠ス。

顯微鏡的所見。粘膜ノ發育一般ニ微弱ナリ,腺ノ發育亦可良ナラズ,其ノ形状ハ通常子宮粘膜ニ於ケルモノト大差ナキモ時ニ又擴張セルモノ存ス,本粘膜ハ月經前期ニ近キ時期ニアルモ,普通月經前期粘膜ニ於ケル如キ著シキ腺ノ迂曲及ビ肥大チ認メズ,又表層ニ於テ脫落膜細胞慘變化ヲ呈セル大綱泡ヲ見ルコト能ハズ,表層上皮ハ單層ニ配列セルモ其ノ高徑ニ著シキ差異チ認メ得ル部アリ,若キ血管チ所々ニ認ム,又全般ニ亙リ白血球チ散見ス,間質結締組織繊維ハ第二例ニ比シヤヤ太キモ,表層ニ於テ其ノ發育甚ダ微弱ナリ。

第三例・患者 V. F. 三十二歳ノー婦人生來健康ナリ、月經十五歳ニテ來潮シ正常ニシテ三日間持續シ、四週毎ニ反覆ス、月經時疼痛等チ感セルコトナシ、二十三歳ニテ結婚シ、爾來三兒チ擧が、其ノ夫ハ健全ニシテ花柳桐ノ既往症ナシ、約一年前ヨリ時々不定ノ出血アリ、最終月經開始後第十三日ニ於テ試験的搔爬チ爲ス、顯微鏡檢查ノ結果癌腫ノ擬ヒアリ搔爬後十三日チ經テ開腹ニヨリ子宮及ピ兩側附屬器テ剔出セリ・

肉眼的所見 剔出子宮ハ通常ノ大サラ有シ頸部ニ於テ輕度ノ癌腫樣變化ヲ見ル、子宮體部ニ於ケル粘膜ノ發育微弱ナリ粘膜厚徑二粍ヲ算ス、兩側卵巢ニ異常ナシ、

顯微鏡的所見、表面上皮細胞ハ單層ニシテ殆ドー様ナル高徑ま有ス、本粘膜ハ既ニ月經前期ニ相當セル時期ニアルニ拘ヲズ腺ノ迂曲、肥大度正常月經前期粘膜ニ比シ微弱ナリ、間質ニ於テ多數ノ「フィブロプラステン」及ビ白血球チ見ル、又所々ニ若キ血管チ認メ得、間質ニ於ケル結締組織繊維ノ發達ハ精々可良ニシテ表層迄細繊維チ認メ得。

第四例. F. B. 三十八歳ノ一婦人生來頑健ニシテ嘗テ病メルコトナシ、十四歳ニテ月經來潮シ正常ニシテ三日間持續ス、二十二歳ニテ結婚シ兒ナシ、最終月經開始後第十六日ニ於テ、白帶下ノ主訴ノモトニ攝爬手術チナス、其ノ後五日ヲ經テ突然下腹部ニ劇痛ヲ訴フ、即チ破裂セル右側卵巣腫瘍ノ診斷ノモトニ開腹、子宮ト共ニ附屬器ヲ剔出シ、左側卵巢ハ之ヲ殘留セシメタリ.

肉眼的所見. 剔出于宮ハ普通ノ大サテ有シ、子宮粘膜ノ再生甚ダ徽ニシテ厚徑一粍チ算ス、右側卵巣 ハ鷲卵大ノ<u>森</u>腫チツクリ、其ノ莖ハ捻轉セリ. 顕微鏡的所見。 掻爬後五日ヲ經過セルノミナルモ既ニ多數ノ腺管ヲ見ル粘膜表層ニ於テハ既ニ上皮ニテ被覆セラレタル部分ト未が被ハレザル部ト存ス。 表層上皮ノ腺表面開口部ヨリ連續的ニ酸生シツツアル狀態ヲ目撃シ得ル所アリ、カカル場合腺底上皮ハ表層ノモノヨリ遙ニ高キ高徑ヲ有スルコトヲ認メ得、一般ニ表面上皮ハ甚が薄ク單層ニ配列ス、上皮下粘膜固有層ニ多數ノ「フィブロブラステン」及ビ多核白血球ヲ見ル、 間質ニ於ケル結締組織繊維ノ酸育甚が微弱ナリ

三 實驗例所見綜括

以上四例中第一例=於テWerth 氏・例ノ如ク重層上皮及ビ上皮中=空胞ヲ有セル細胞ヲ認メ得タリ、Werth 氏ノ例=於テハ重層上皮ハ搔爬後十二日目=剔出セル子宮=於テ、空胞上皮ハ第八日及ビ第十二日=剔出セル例=於テ現ハレシモノナルガ、余ノ例ハ搔爬手術後第十二日=剔出シ該子宮ハ恰モ月經後期=相當シ粘膜ノ環殖其ダ著シカリシモノナリ。

第四例ハ搔爬後五日ヲ經過セルノミナル為粘膜固有層及ビ表面上皮ノ發育微弱ニシテ猶非被覆セラレザル部分モ存セリ、第二例ハ最終月經第三週ノ初メニ於テ、第三例ハ第二週ノ終リニ於テ搔爬事備ヲナシ共ニ月經前期=旣ニ相當セルニ拘ヲズ、月經前期ノ粘膜變化顯著ナラザリシハ前記林敏郎氏ノ第三週目ニ於ケル搔爬ハーニ週間月經ノ遅發ヲ來スト、記載セル事實ト幾分關係ヲ有スルニアラザルヤト思惟セラル、其ノ他腺ノ狀態、間質細胞及ビ白血球分佈ノ有樣等殆ド Werth 氏 Richter 氏ノ記載ニ近キモノ多カリシモ茲ニ特記セントスルハ、搔爬時期ト粘膜再生力トノ關係ナリ、組織再生ノ速度ハ他ノ創口ニ於ケル如ク損傷セラレタル組織ノ反應力ニ關係ヲ有ス、此反應力ハ各個人ノ一般狀態及ビ局所狀態ノ如何ニョリ左右セラルルコト論ヲ俟タズ、即チ成熟婦人子宮粘膜ニ於テハ當該婦人ガ月經週期ノ如何ナル時期ニ於テ搔爬手術ヲウケシヤニョリ、再生速度ニ差異アルベシ、換言スレバ生理的ニ旣ニ再生能力ヲ有スル月經後期ニ於ラ手術ヲ施行スルトキハ各組織成分ハ最モ速ニ再生スベシ、本事項ニ關シテハ Richter 氏旣ニ言及セルモ詳細ナル比較成績ハ記載セザリキ。

子宮粘膜搔爬後ノ再生力ヲ述プルニ先チ,子宮粘膜ノ週期的變化ニツキ最モ詳細ナル研究ヲナセル R. Schöder 氏ノ最近ノ學説ヲ摘錄セントス。

Schröder 氏ハ月經週期ヲ剝離一再生期, 增殖期, 分泌期ニ分劃シ, 月經期(剝離期) ニ於テハ子宮粘膜ハ大約其ノ厚徑ノ五分ノ四剝離脱落ス而シラ殘留セル 薄層ヲ Basalschicht 基底層, 脱落スル部分ヲ Funktionschicht 機能層ト稱シ, 前 者二於テハ其ノ腺ハ多クノ場合斜走シ扁平ナルモ機能層二於テハ腺管ハ縦走シ腺機能又兩層二於ラ異ル. 分泌期二於テハ機能層ノ腺ハ肥大迂曲シ其ノ上皮ハ「ムチカルミン」ニョリ染色スル物質ヲ分泌シ, 胞體內及ビ腺腔ニ「グリコゲーン」及ビ脂肪ヲ著明ニ證明シ得尙ホ基底層ノ間質細胞ハ紡錘狀ヲ呈スルモ機能層ノ間質細胞ハ紡錘狀又ハ星芒狀ヲ呈シ,大ナル胞體ヲ有ス,基底層ハ常ニ〇・七乃至一・二粍ノ厚徑ヲ有スルモ機能層ハ月經後成熟シツツアル濾胞ニ由來スル「ホルモーン」ノ作用ヲウケ,増殖期ニ於ラ速ニ發育シ,月經開始後第八日ニ於ラ機能層ノミノ厚徑ニ・五粍,第十日ニ三・五粍ヲ算ス,此頃ョリ粘膜厚徑ノ増加ハ甚シカラザルモ,腺上皮細胞ノ増殖著シク腺ハ迂曲シ始ム,而シラ第十四日乃至第十六日ニ於ラ, 濾胞破裂排卵後黄體形成セラルルニ至レバ子宮粘膜ハ黄體「ホルモーン」ノ作用ヲウケ分泌期ニ移行ス,カクラ第二十日乃至第二十六日ニ於ラ機能層ハ三・五乃至三・七粍トナリ稀ニ四・一乃至四・六粍ニ達スルコトヲ記載セリ・

今ヤ Schröder 氏ノ説ハ R. Meyer 氏 Meyer-Rüegg 氏其ノ他一般ノ學者ニョリ承認セラルルニ至ル。

則チ子宮粘膜ハ月經時ニ於ラ基底層ノ上部ニ於ラ剝離脫落後卵巢「ホルモーン」ノ作用ヲウケ迅速ニ増殖シ月經開始後第十日ニ於ラ粘膜全層ノ厚徑四·五粍ヲ有スルヲ通常トス。

増殖期ニ於ラ再生力ノ迅速ナルコトハ余ノ第一例ニ於ラ最モ明瞭ニ證明セラレタリ, 即チ同患者ハ二十八日毎ニ反覆シ四日間持續スル月經ヲ有シ, 月經開始後第五日ナル増殖期ニ於ラ搔爬手術ヲウケ, 手術後十二日ヲ經過シテ全子宮ハ剔出セラレシモノニシテ其ノ體部粘膜厚徑五粍ヲ算シ, 甚ダ速ナル發育ヲ遂ゲシモノト稱スベク之ヲ第二例, 第三例ノ將ニ分泌期ニ移行セントスル時期ニ於ラ搔爬シ第二例ハ搔爬手術後十一日(子宮體部粘膜厚徑一・五粍)第三例ハ搔爬手術後十三日(體部粘膜厚徑二粍)ヲ經過シテ剔出セルモノニ比シ其ノ粘膜厚徑ニ著シキ差異アルヲ認メタルノミナラズ, 之ヲ通常子宮粘膜ノ月經時機能層ノ剝離脫落後其ノ基底層上ニ再生セル第十日頃ノ粘膜厚徑ニ比シテモヤヤ厚キコトヲ示セリ, 第一例ト第二例, 第三例ノ粘膜ニ於ケル厚徑ノ差ハ發育速度ニ 甚シキ遅速アルコトヲ語ルモノナリ。尚ホ發育可良ナリシ第一例ト他ノ二例トハ細胞間結締組織機維網ニ著シキ差違アリ即チ増殖期ニ於ラ手術ヲ施行セラレ

シ場合粘膜再生迅速ナル為間質細胞間繊維ハ甚ダ繊弱ニシラ細ク網限甚ダ大ナリ【第一圖參照】Fierming 氏 Maximow 氏等ニ從フ時ハ結綿織原繊維ハ「フィイブロブラステン」ノ原形質周縁部ヨリ生ズ、即チ粘膜ノ増殖急速ナル時ハ間質細胞ハ盛ニ増殖スルモ細胞ヨリ分離シテ生ズル結締織原繊維ノ發生ハ之ニ伴ハズヤヤ遅延スル為カク繊細鬆粗ナルモノナルベシ、他ノ分泌期ニ搔爬再生セル第二例、第三例ノ粘膜ニ於テハ間質細胞ノ増殖モ緩徐ニ行ハレ從ツラ細胞間結締織繊維モ比較的太カリシモノナランカ。

四結論

- 1 掻爬手術後再生セル子宮粘膜ニ於テハ時ニ重層上皮及ビ空胞ヲ有スル上 皮ヲ粘膜表面ニ認ムルコトアリ。
- 2. 余ノ僅少ナル例ヲ以テ一般ヲ律スルコト能ハザルモ、月經後、增殖期ニ 於ラ搔爬手術ヲ行フ時ハ分泌期ニ於テ之ヲ行ヒシ場合ニ比シ其ノ粘膜再生力强 其ナリ.
 - 3. 分泌期ノ掻爬手術ハ次囘月經ヲヤヤ遅延セシムル場合存スルガ如シ.

附圖說明

第一圖 嫁大[ツァイス], 接眼[レンス]四, 接物[レンス] D.D.

月經開始後第五日ニ搔爬手術チナシ,其ノ後十二日チ經過シテ剔出セル于宮體部粘膜ノビールショースキー氏法ニョリ鍍銀セルモノ. V 空胞上皮.細胞間結締組織機維ノ繊細ニシテ大ナル網眼チ有スルコトチ示ス.

第二圖 廊大同上

四十二歳ノ婦人ョリ得シモノニシテ月經開始後第十六日ニ於テ喇叭管炎ノ為剔出セル干宮體部 粘膜ノ綾銀セルモノ、 閲覧結締組織機維ノ太サ網眼チ第一例ト對照スル為掲載ス(月經正常四 週毎ニ反覆シ三日間持續ス)

第三圖 麻大「ツァイス」、接眼「レンス」四、接物「レンス」、「アポクロマート」八 m.m. 三十歳ノ一患者ヨリ得シ炎性子宮粘膜ノ間質ニ於ケル脂肪沈著ノ狀チ示ス(「シャルラッハロート」染色)

第四圖 廓大「ライツ」、接眼「レンス」ー、接物「レンス」七.

三十七歳ノ一婦人ヨリ得シ月經前期子宮粘膜. 腺細胞基底部ニ著シキ脂肪沈著チ見ル.

主ナル&考書目

- 1) Adachi, Über das Vorkommen doppeltbrachender Lipoide in menschlichen Ovarien und
 Uteris nebst einer Bemerkung über Fettablagerung in denselben Organen. Zeitschrift f. Geb.
 u. Gyn., 76. Band.
- 2) 淺田弘太郎氏, 子宮粘膜, 脂肪ト週期性變化トノ關係. 日本婦人科學會雜誌, 第十三卷, 第一號。
- 3) Aschheim, Zur Histologie der Uterusschleimhaut. Zeitschrift f. Geb. u. Gyn., 77. Band.
- 4) Aschoff, L., Pathologische Anatomie. I. II. Band.
- 5) Bumm, Lehrbuch für Geburtshilfs.
- 6) Flemming, Zur Entwickelungsgeschichte der Bindegewebsfibrillen. Internat. Beiträge z. wissenschaftl. med. Festschr. f. R. Virchow, Bd. 1.
- 7) v. Gierke, Aschoff. Pathologische Anatomie, 1. Band.
- Golowinski, Zur Kenntnis der Histogenese der Bindegewebsfibrillen. Anatomische Hefte
 Abt. Bd. 33.
- 9) 林敏郎氏, 子宮内膜掻爬ノ次囘月經ニ及ポス影響. 日本婦人科會雜誌,第十二卷.
- 10) Hitschmann u. Adler, Der Bau der Uterusschleimhaut des geschlechtsreifen Weibes mit besonderer Berücksichtigung der Menstruation. Monatsschr. f. Geb. u. Gyn., Bd. 27, 1908.
- Hörman, C., Die Bindegewebsfasern in der Schleimhaut des Uterus, Archiv f. Gynäk, Bd. 86, 1908.
- 12) Huguenin, B., Über den Fettgehalt des Sarkoplasma der glatten Muskelfasern der schwangeren und puerperalen Uturus. München med. Wochenschr. Nr. 8, 1912.
- 13) Hueter, Über chronische Metritis Archiv f. Gyn., 87. Band.
- 14) 岩 田 正 道 氏, 喇叭管ニ於ケル週期的變化ニ就キヲ. 北海道醫學會報,第一年,第一號.
- 15) 川村鱗也氏, 人體及ビ動物體ニ於ケル脂肪問題ニ就テ. 日新醫學雑誌,第七卷.
- 16) Lubarsch, O., Aschoff pathologische Anatomie. 1. Band.
- 17) Meyer, R., Beiträge zur Lehre von der normalen und krankhaften Ovulation und der mit ihr in Beziehung gebrachten Vorgänge am Uterus. Arch. f. Gyn., 113. Band, 2. H., 1920.
- 18) Meyer-Rüegg, Die Vorgänge in der Uterusschleimhaut während der Menstruation. Archiv f. Gyn., 110. Band, 1919.
- 19) Miller, Über die differential-diagnostische Bedeutung der plasmazellen bei eitrigen Adnexentzundungen. Arch. f. Gyn., 90. Band, 1910.
- 20) Munk, F., Über die lipoide Degeneration. Virchow. Arch., Bd. 194, 1908.
- 21) 村尾信逸氏, 卵巣雄ニ子宮ニ於ケル脂肪問題. 大正婦人科會報,第十一號.
- 22) Nagel, Handbuch der Anatomie. Band VII.

- 23) Richter, J., Zur Regeneration der uterusschleimhaut nach Ausschabung. Gynäkologische Rundschau 8 Jahrg, 1914.
- 24) Schridde, Die histologische Diagnose der Salpingitis gonorrhoica. Qeutsche med. Wochenschr. Nr. 28, S. 1251, 1908.
- Schröder, R., Anatomische Studien zur normalen und pathologischen Physiologie des Menstruationszyklus. Archiv f. Gyn., 104. Band, 1. H. 1915.
- 26) Derselbe, Über das Verhalten der Uterusschleimhaut zur Zeit der Menstruation. Monatsschrift f. Geb. u. Gyn., Bd. 39.
- 27) Sugi, K., Über die Lipoid in menschlichen Uterus. Zeitschr. f. Geb. u. Gyn., 78. Band.
- 28) Unterberger, Über das Auftretten von Fetropfehen in den Muskelzellen des Myometrium bei der sogenanten Metritis chronica. Archiv f. Gyn., Bd. 90, 1910.
- 29) Weishaupt, Zur Lehre von der Endometrititis und der Bedeutung der plasmazellen bei pathologischen Gewebsreaktionen. Zeitschrift f. Geb. u. Gyn., Band 62, 1908.
- 30) Werth, R., Untersuchungen über die Regeneration der Schleimhaut nach Ausschabung der uteruskörperhöhle. Archiv. f. Gyn., 49. Band.
- 31) Westphalen, Zur Physiologie der Menstruation. Archiv. f. Gyn., 52. Band, 1896.

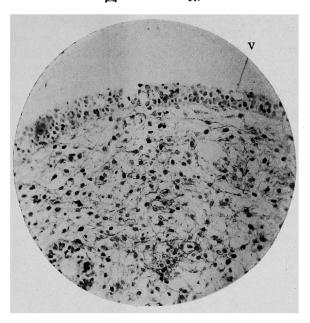


圖 二 第

